## 読書 - 1、私たちの 世界地図

人類が文字を発明し、賢者の格言、 慣習や法律、そして各民族の歴史き、 書き残すという作業を始めたと前は 書が世に生まれた。それいで語されいで聞くだけのもったとだけのもしていることだけのもしていることだられ、世界はどの世代になかを示す世界地図、ないは暗闇の中で周囲を照らる。

今日でも聞いて学ぶということはをいうことはをの生活の中で重要人を重要人を言される。聞くさせ、でも、これをできるに触くさせなが生活をがらいたがはない。これが表現である。では、これがある。である。では、これがある。では、これがある。では、これがある。でも、これがある。でも、これがある。でも、これがある。でも、これがある。でも、これがある。でも、これがある。でも、これがある。でも、これがある。のは、これがある。のは、これがある。のは、これがある。のは、これがある。のは、これがある。のは、これがある。のは、これがある。のは、これがある。のは、これがある。のは、これがある。のは、これがある。のは、これがある。のは、これがある。のは、これがある。のは、これがある。のは、これがある。これがる。これがるる。これがるる。これがるる。これがるる。これがるる。これがなる。これがなる。これがなる。これがなる。これがなる。これがなる。これがなる。これがなる。これがなる。これがなる。これがなる。これがるる。これがる。これがなる

大部分が文字となった言葉なのである。それは誰かに読まれ、その人と対話をするのを待っているのである。

## 注意を集中する

人間の視野や知識はそれ自体ではと ても限られた狭いものであるが、聞 くことと読むことはそれを広げてく れる基本的な習性である。そのう え、私たちの展望を豊かにし、現実 世界の複雑さと単純さを理解あるた めにも役に立つ。ところで、聞くこ とも読むことも、まず注意を集中す ることを前提とする。マスコミや ソーシャル・ネットワーク、そして 電話販売に努める人々は、できるか ぎりのもうけを引き出すために大衆 の注意を引こうとして競い合う。こ うして宣伝広告が氾濫し、それに囲 まれる私たちの注意は容易に散漫に なる。このような注意散漫の状態 は、ビッグデータの有用性や大手の 通信会社にとって役に立ち続けるに しても、私たちを軽薄な人間にする 危険がある。なぜなら絶えず外部 注意を向けさせ、落ち着いて自分ら 内面を省察することを妨げるからで ある。この注意散漫の危険に対し て、一のこと、一冊の本、他力は 告重な働きをする。

面化するおかげでより深く生きることができる。

読む、とは語源的には「まとめ る」、「集める」ということであ る。本当に読むことができるという ことは文字を発音できるということ 以上のことである。それは心を静 め、自らのうちに入り込むことがで きること、状況と人物を読み取る能 力をもつことである。対話はきわめ て人間らしい行為であるが、これら の能力によってより上達する。しか しながら、一定の文化的教養を持つ 人にとっても、生活のリズムが加速 されることによって読むことから遠 ざかる危険がある。注意を払うべき 事があまりに多すぎて、何週間も 何ヶ月も一冊の本を手にすることが ないということが起こりえる。そう なると本来3次元であるはずの世界 が、二次元の平面にしか見えなくな る。私たちの対話も、個人的社会的 現実の微妙な色合いを感知できるは

ずなのに、鮮明な原色しか表現できないものとなり、より人間的な、より美しい社会を築くのに貢献することなど夢物語になる。

聖ホセマリアは、自分に近づく人た ちに、広い視野を持ち、それを培う よういつも励ました。というのは、 キリスト教徒は福音をあらゆる所に 広めるために、繊細な感受性を持 ち、物事を深く考え、自分の意見を 検討することのできる人間であるべ きだからだ。きちんと選択された本 を読むことは、この使徒的態度を育 てるために有効な手段の一つであ る。「カトリック的、普遍的な考え 方をしたいと望むあなたに、いくつ かの特徴を書き写してあげよう。 一 正統カトリックの恒久不変の事柄に ついて、広い視野をもち、しっかり と理解を深める。 一哲学や歴史の解 釈の分野において、決して軽率にな らず正しく健全な熱意をもって、典 型的な伝統思想を新たな形で提示す

る。一現代の科学と思想の動向を注 意深く見守る。一社会構造と生活様 式の現在の変化に対して、積極的で 開かれた態度を示す」(『拓』 4 2 8)。

## 読書の習慣

教師や教育の専門家たちは、読書の 習慣は幼児期にできなければ、後で それを身につけるのは難しいと言 う。また読書をする子とほとんどし ない子とでは、大きな違いがあると も指摘する。読書をする子どもは、 自分の思いを表現することがより上 手で、他人を理解する能力において も、自己認識においても優れてい る。それに対して読書以外の楽しみ にはまってしまった子どもたちはな かなか成熟しないのが普通である。 たとえばビデオゲームなどをすると いうより、しすぎることによって、 若者たちは想像力が乏しくなってい るようだ。それによって、自己の内 各家族のなかで、この役割を果たすまができる人を見つけるのはある人を見つけるのはないの母親、あるいは祖父親いは祖父若の兄弟、かもっての指導者にあるがとない。また学校の先生やの指導者にあるがらいるのかをもちがしながら、若者自身がらいる名著や相手がら、若者自身がらいる名著や見ながら、若者自身での道を発見するよう導くのだ。

この仕事はそれほど時間を必要とす るものではないが、とても重要で、 少し頭を働かせた粘り強い指導がい る。ときには自ら模範を示しなが ら、彼らが読書の時間を見つけ読書 の楽しみを味わうことができるよう に助ける必要があるかも知れない。 同時にいつも読書を優先し隣人との 会話や関わりをなおざりにするとい う利己主義に陥らないよう教えるこ とも忘れてはならない。おそらく多 くの人は初めて読んだ本やプレゼン トでもらった本のことを覚えている だろう。また子どものときに話して もらった物語や、少年少女向けの古 典文学や聖書の話を覚えているだろ う。ひょっとしたらある詩を熱心に 解説してくれた、あるいはある文学 者への情熱を感染させてくれた先生 の姿を思い出すのではないか。

社会人になって仕事を始めると時の 流れが速くなり、読書のおもしろさ を知っている人でさえ本を読むこと

に少しの時間しか割けないという状 態に陥ることがある。そのために読 書の時間を確保することが重要課題 になる。おそらく読書のための時間 はわずかしかないのが普通だろう。 しかし、何を優先させるかを明確に し、つまらない活動に割く時間を削 ることができればなんとかなる。つ まり秩序の問題なのだ。ある意味 で、「私たちに足らないのは時間で はなく、集中力」と言える。同時 に、色んな機会に現れるちょっとし た空いた時間を利用することでそれ なりに楽しめる。たとえば、電車や 飛行機や公共の交通手段での移動時 間、そしてもちろん休息の時間。い つも本を持っている人は 一今では電 子本によってより簡単になったー と きに突然現れる少しの自由な時間を 利用できる。このような細切れの時 間を集めることはあたかも水滴を畑 にまくことのように見えるかも知れ ないが、何週間も何ヶ月も続けてい るとそこには立派な植物が育つ。

## 本の洪水の中で

毎年全世界で何億という本が出版されている。この他に、ますまず門化する数え切れないほどの学術的書籍や論文。それに加えてインターが多くの場合無料で、無数の情報や主張を提供してくれる。このような目もくらむような可能性を考えたして、明らかな時間の不足を考えると、聖ヨハネ・パウロ2世が過去

を回想しながら言われた考察がかつ てなく現実味を帯びてくる。「私は いつも、どんなものを読んだらいい のかというジレンマを持ってきまし た。私は、より本質的なものを選ぶ よう努めました。出発物はこれほど 多いのです。すべての本が価値のあ るもの、有益なものというわけでは ありません。読むに値するものを選 び分ける目と、そのことについての 意見に耳を傾けるすべを知る必要が あります。| (ヨハネ・パウロニ 世、『立ちなさい、さあ行こう』、 106

読書は休息のときのよい気晴らしに なる。気晴らしのために多くの本が ある。それとは別に、精神を育り 読書もある。それはおそら教育的で 時間がかかる。昔から教育的でかつ面白い書物が数多く世にほと かで面白し、にもかからずいと る。しかし、の読書しか読まないも いる。大切なのは、闇雲に沢山読も うとすることではなく、各自の能力 と状況に合わせて、より豊かは世界 観や人間観を持つために、哲学が 文学、歴史、自然科学、芸術 を主なる。私な学の書がも記している。 私たちを精神的に、を示する る。私たちを精神的にを示する もいる物語や、鋭い視点を示する がいず書は無数にある がいで、少いしる で、とは難しくない。

とがその本の価値を保証するわけではないから。「背表紙とカバーだけが最高のものである本がある」とでインズが皮肉を込めて言っておりる。いつも最新のものを知っているはどいう強迫観念に負けると、もはという強迫で、あるいは創造的で、あるいは創造ない。書物を見逃すことになりかねない。

つまらない映画を見たとき、貴重な 2時間を無駄にしたと後悔すること がある。もしそうなら、内容は悪く はなくても本当に私たちの興味を満 足させるにはいたらない本を読み終 えたときは、もっと多くの時間を 失ったことになる。もし一冊の本が 私たちの心を掴まないなら、その読 書を続ける価値はないと言えよう。 もっと価値のある数え切れない本が 私たちを待っているから。読んでい る本をむやみに変えることは忍耐の 不足や信念のなさを表す場合もある が、本当に興味深い本や有用な本に

出会う機会を提供うることになる場合もある。

ある本を読み始めたからといって、 本を斜め読みしないとか最後まで読 むとかいう契約を著者と交わしたわ けではない。初めての本を手にする と、きまった頁を開く習慣を持つ人 がいる。そうしてその頁が気に入っ たらその本を読むが、もし気に入ら なければ本を閉じることにするの だ。なるほど、本の価値に気がつく ために少し我慢して読み続けること は良いことだが、私たちとしっくり いかない本に多くの時間を与える必 要はない。言うまでもないが、偉大 な古典文学を読むときに起こりえる ことだが、しっくりこないのは私た ちの素養が足らないからということ もある。そういう場合、その本はし ばらく本棚に置いておいて、数ヶ月 後か数年後にもう一度開いてみるの が良いかもしれない。いずれにして も、私たちが生きている間に、今日

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/dokusho-1/(2025/11/29)